

日本語の語源

音韻変化論
からさぐる

角川小辞典

10



田井信之



飛鳥

4 あすか

● 古代の都アスカ（飛鳥・明日香）の里は「トミタル（富み足る）明日香」といわれた。このトミタルがトムトリ・トプトリ（飛ぶ鳥）に転音し、明日香の枕詞になった。のち飛鳥にアスカの訓が生じた。● 陰暦二月は草焼きの時節でクサヤキ月といったが、このクサヤキがクサラキに転音し、さらにキサラギ（如月）に転音した。● モテアソビ・モチアソビ（持遊び）はモチヤ



日本語の語源

音韻変化論
からさぐる

著 者・田井信之

発行者・角川春樹

印刷者・和田彰三

製本者・宮田四郎

発行所・角川書店

東京都板橋区小豆沢一の二十四の二十六

東京都文京区後楽一の二十三の七

東京都千代田区富士見二の十三の三・郵便番号102

振替口座 東京三一 一九五二〇八・電話 03(265)七二二(代)
初版・昭和五十三年十月十日発行

装丁・代田 斐

製版印刷・東洋印刷

製本・宮田製本

落丁本、乱丁本はお取り替えいたします

0581-061000-0946(0)

© Printed in Japan

著者紹介

田井信之(たいのぶゆき) 明治四十四年十二月、香川県三豊郡豊中町本山(現在所)に生まれる。

昭和十年、大東文化学院高等科卒業
奈良・日本地名学研究所所員

著書『地名語彙の研究』(昭34)

は し が き

新しい「国語音韻変化論」を提唱し、それを適用した語源研究の成果を報告するために本書は生まれた。

思えば、長い道中であつた。筆者の間に答えて金子元臣先生が「アスカ・カスガのみならず地名の意味はいつさいわからない。ひとつ、君の手で謎を解いてみては」と言われた言葉が若者を刺激し、以来、地名のとりこになってしまった。

文献を渉獵したり山野を跋涉はつしやうして個々の地名の調査研究に従事したが、結局、徒勞に帰して、謎を解く手掛かりはつかめなかつた。

紆余曲折の末、大局的見地から全地名を展望し、語形の比較・分類を音韻論的に進める作業を始めた。帰納と演繹を繰り返すこと多年、ついに地名の起因語に到達することができた。それは、中国大陸の江南地方からおそらく稲作に伴伴して伝来したと推定される中国語であつた。起因語をピラミッドの頂点として整然とした転化が実現しており、飛鳥あすかも春日かすがも、全地名がその転化形であることが確認された。転化を支配していたのが「国語音韻変化論」である。

研究の成果をまとめて報告したのが論文形式の「地名語彙の研究」(昭34刊)であった。最近、万人に理解されやすい簡明な表現法が見つかったので、改稿して上梓の準備をすすめている。

およそ、言葉は語形(音声)と意味との結合であるが、発音運動の容易さを求めて語形はどんどん変化をとげた。語形のくずれ易さは日本語の特質(開音節)にもとづく宿命でさえある。変革された語形を音韻論的に検討しながら復原する作業が語源の研究の第一歩であった。

たとえば、青森市や弘前市の夏の風物詩であるネブタ祭りの場合、七夕祭りの別名であることに注目し、母韻の交替を想定してこれを復原すると、ネバタ・ナバタを経てタナバタの語にさかのぼる。

また、農村の春の行事であるクサヤ、キ(草焼)の語がクサラ、キを経てキサラギ(如月)に変化したことは、ハシヤグ(燥ぐ)をハシラグという東北地方の子交^[jɪ]例に照らして確認された。

従来の研究家は、ネブタはネブタシ(睡たし)に語源を求めて、睡魔を追ひ払う習俗と説き、キサラギは衣更着で、寒くて着物をさらに重ねて着る月と説く。

こうした付会の考説がはびこっているばかりだから、語源の研究水準は江戸時代さながらで、まるで学問以前の状態である。他の科学が飛躍的發展をとげたのに較べて、ひとりこの分野だけが沈滞している理由の一つは、日本語の特質である語形変化の音韻論的研究をおこたったからである。

こうした風潮をもたらした根源は、ズバリ言って、橋本進吉博士の唯一の黒星「上代特殊仮名遣」

説である。甲乙兩類は單に用字法だけの問題（用字便覧の反映など）であるにもかかわらず、音声の反映と誤認して、乙類[i・ê]・[ö]の音価は中舌母韻（ア段の十音節ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ以外の発音は絶対に不可能）であると速断した。（二七四ページ「音のない言葉」参照）。

一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝えて、虚説はたちまち定説となつて学界を風靡した。そのため、「国語音韻論」研究の芽はふた葉にして摘み取られて、斯界は荒廢の一途をたどった。

筆者は師承のない自由な立場からひとり自国語を見つめてきた結果、その特質を把握することができた。結果的には橋本説に捉われず、公正・自由な発想ができた点で、どれほどプラスになったか知れない。半世紀の長きにわたつて斯界を昏迷に陥れた橋本説の迷妄を今こそ払拭すべきである。

讃岐の片田舎にすむ無名の研究家に、発表の場を与えて頂いた佐野正利部長のご高配、並びに、角川書店の破天荒のご英断に篤くお礼申し上げる次第である。

昭和五十三年八月十五日

著者しるす

凡 例

- 一 仮名遣いは、必要に応じて旧仮名遣いを用いた。
- 二 引用例文には出典を示した。出典はわかる程度の略記で示した。
たとえば、記——古事記、源——源氏物語などである。
- 三 その言葉の使用地域を示すとき、古い文献も用いたので、讃岐・伊予大三島など、旧国名で示した箇所がある。また、福岡県金蔵郡（現在の北九州市東部地域）のように、旧郡名で示したものもある。
- 四 語句の検索には巻末の語句索引を利用されたい。主要な語句は索引できるようにした。

目次

はしがき.....1

序章 音韻変化の結晶.....15

- 飛ぶ鳥の(17) 足引きの(18) 玉梓の(18) にはたづ
- み(19) なまよみの(19) 悪しき実(19) うどの大木
- (20) うなぎ登り(21) めくじら立てる(21) 花見が
- てらに(22) 土佐いごっそう(23) 肥後もっこす(24)
- ねぶた(24) かまくら(雪室)(25) 如月(25) 梅
- 雨(26) あけび(26) 土筆(27) へそくり(27)
- 勝手(28) 雨がち(接尾語)(29) べらぼう(30) 鮎・
- 鮭(30) なめくじ(31) なまはげ(31) 相撲(32)
- それがし(某)(33) 無闇矢鱈(34) 猫も杓子も(35)
- 岳・崖(36) わらび(蕨)(36) いたどり(虎杖)(37)
- 葱・根深(37) めんそうれ(38) さかい(接助)
- (39) ばってん(接助)(40) 紫陽花・撫子(41) と

第一章 子音の交替（子交）……………59

ころてん（心太）（41） おほぼこ（車前草）（42） 手塩にか
 ける（42） 両拳発（43） 厄介（43） 狗奴国（44）
 伯楽（45） 駄目（46） めんこい（47） 余程（48）
 平氣の体（49） たまさか（50） 数の子（50） ざっくば
 らん（50） やばい（51） せんぐり（51） 無花果（51）
 使役・尊敬の助動詞（52） 斯く許り（54） 変わりやす
 い理由（56） 子音と母韻（58）

序節 交替の理論……………61

第一節 舌音内の子交……………72

- | | | | | |
|------------------------------------|--------|----|--------|----------|
| 1項 | タ行音[t] | —— | ダ行音[d] | 間……………72 |
| 2項 | ダ行音[d] | —— | ナ行音[n] | 間……………73 |
| 3項 | ナ行音[n] | —— | ラ行音[r] | 間……………75 |
| 自発・受身・可能・尊敬の助動詞（77） 語形の変化（81） | | | | |
| 4項 | ダ行音[d] | —— | ラ行音[r] | 間……………85 |

5 項	タ行音 [t] — サ行音 [s] 間	87
6 項	サ行音 [s] — ザ行音 [z] 間	91
7 項	ダ行音 [d] — ザ行音 [z] 間	92
はで・はぜ (稲架) (93)		
8 項	ザ行音 [z] — ナ行音 [n] 間	94
9 項	ザ行音 [z] — ラ行音 [r] 間	95
10 項	ナ行音 [n] — ヤ行音 [j] 間	96
11 項	ラ行音 [r] — ヤ行音 [j] 間	98
12 項	チ音 [t] — ヒ音 [ç] 間	100
13 項	シ音 [ʃ] — ヒ音 [ç] 間	100
日一夜 (103)		
結び	舌音内の子交線	104
〔参考〕		
	タ音 [t] — ラ音 [r] 間	104
第二節 唇音内の子交		
1 項	パ行音 [p] — バ行音 [b] 間	105

2 項 パ行音 [b] — マ行音 [m] 間 105

3 項 パ行音 [p] — フ行音 [f] 間 108

4 項 フ行音 [f] — ワ行音 [w] 間 109

5 項 ワ行音 [w] — ア行音〔母韻〕 110

結び 唇音内の子交線 110

第三節 喉音内の子交 112

1 項 カ行音 [k] — ハ行音 [h] 間 112

瓜食めば (113)

2 項 カ行音 [k] — ガ行音 [g] 間 118

結び 喉音内の子交線 119

第四節 唇音と舌音間の子交 120

1 項 パ行音 [p] — タ行音 [t] 間 120

打消の助動詞 (121)

2 項 バ行音 [b] — ダ行音 [d] 間 123

3 項 マ行音 [m] — ナ行音 [n] 間 125

推量の助動詞 (126)

けしからむ (128)

魚島 (132)

4 項 ワ行音 [w] — ヤ行音 [j] 間 134

5 項 ワ音 [w] — ナ音 [n] 間 135

第五節 唇音と喉音間の子交 137

1 項 パ行音 [p] — カ行音 [k] 間 137

2 項 バ行音 [b] — ガ行音 [g] 間 137

3 項 マ行音 [m] — ガ行音 [g] 間 138

4 項 ファ行音 [f] — ハ行音 [h] 間 139

第六節 喉音と舌音間の子交 141

1 項 カ行音 [k] — タ行音 [t] 間 141

給ふ (142) かかし・こけし (145)

2 項 タ行音 [t] — ハ行音 [h] 間 146

3 項 カ行音 [k] — サ行音 [s] 間 147

4 項 サ行音 [s] — ハ行音 [h] 間 147

優雅な上方語 (148)

第二章 母韻の交替（母交）

5 項	ガ行音 [g] — ナ行音 [n] 間	152
-----	---------------------	-----

序節	交替の理論	155
----	-------	-----

地名の誕生 (158) 音声のない言葉 (174)

第一節	前舌母韻間の母交	181
-----	----------	-----

1 項	ア [a] — エ [e] 間	181
-----	-----------------	-----

2 項	エ [e] — イ [i] 間	186
-----	-----------------	-----

3 項	ア [a] — エ [e] — イ [i] 間	191
-----	-------------------------	-----

4 項	ア [a] — イ [i] 間	193
-----	-----------------	-----

しだ (時) (196)

第二節	奥舌母韻間の母交	197
-----	----------	-----

1 項	ア [a] — オ [o] 間	197
-----	-----------------	-----

2 項	オ [o] — ウ [u] 間	206
-----	-----------------	-----

3 項	ア [a] — オ [o] — ウ [u] 間	214
-----	-------------------------	-----

4 項 ア [a] — ウ [u] 間 216

言はく・告ぐらく (219)

第三節 奥舌母韻と前舌母韻間の母交 225

1 項 ウ [u] — イ [i] 間 225

2 項 オ [o] — エ [e] 間 231

せく・せける (232)

3 項 オ [o] — イ [i] 間 233

4 項 エ [e] — ウ [u] 間 236

5 項 ウ [u] — イ [i] — エ [e] 間 237

6 項 イ [i] — ウ [u] — オ [o] 間 238

7 項 ア [a] — オ [o] — ウ [u] — イ [i] 間 238

8 項 ア [a] — オ [o] — イ [i] 間 239

9 項 エ [e] — オ [o] — ア [a] 間 239

10 項 イ [i] — エ [e] — オ [o] 間 240

11 項 ウ [u] — イ [i] — ア [a] 間 241

いか（関西）たこ（関東）（241）

第三章 音節の脱落……………243

第一節 奔放な脱落……………245

第二節 少数音節の脱落……………261

推定の助動詞（262） いかい・でかい（263） うづくまる（283）

第三節 多数音節の脱落……………284

無道（290）

第四章 単音の脱落（音便）……………295

その一 子音の脱落……………297

第一節 唇音群の子音の脱落……………299

第二節 舌音群の子音の脱落……………304

やくざ（304）

第三節 喉音群の子音の脱落……………309

まいまい (310)

その二 母韻の脱落 315

第一節 撥音便 316

第二節 促音便 324

第五章 縮 約 331

第一節 母韻と子音の脱落 333

推量の助動詞 (346) 打消の推量 (351) 虹 (355) 朝 (357) いかめし (366)

第二節 直音音節の母韻の脱落 368

関東語・関西語 (378)

第三節 直音音節の母韻と母韻音節の融合 379

直音と拗音 (382)

第六章 音節の転位 385

ひたすら (394)

第七章 子音・音節の添加……………395

その一 子音の添加……………397

第一節 唇音群の子音の添加……………397

第二節 舌音群の子音の添加……………400

新玉の(402) 悉皆(404) 直音の拗音化(408) ひょうげ(411)

第三節 喉音群の子音の添加……………414

その二 音節の添加……………416

第一節 促音の添加……………416

第二節 カ行音の添加……………420

第三節 撥音の添加……………420

第四節 ラ行音の添加……………422

第五節 母韻音節の添加……………422

第六節 「サ」の添加……………423

第七節 「ヨ」の添加……………424

語句索引……………425

序 章
音韻變化の結晶